

## 近づくろ考えるいこと

浪江町長 馬場 有

このたびの熊本地震の被災地の皆さまには、心からお見舞いを申し上げます。

私たちが経験した大地震と違い、直下型で、あれだけの住宅崩壊を見ると、本当に大変なことになったと思います。家を失うという同じ経験をした浪江町民の中からは、義援金や支援助資などの形で応援が始まっていますし、町としてもできる限り支援をさせていたきたいと考えています。

被災地では一刻も早い住宅の手当てが必要なところで、関係者の方々は懸命にやっておられると思いますが、過去幾多の震災で得た知恵を生かして、もう少しできることがありそうな気がしてなりません。東日本大震災のときも、仮設住宅がすぐに建てられないなら、たとえば豪華客船を停泊させて一時的に宿泊所にしたらどうか、というアイデアが出たと記憶しています。そういう知恵が今回あまり生かされているように思えないのは、やはり規制の枠にとらわれているためでしょうか。

福島第一原発事故の国会事故調の委員長を務めた黒川清氏の最近の著書、「規制の虜」を読みました。日本人全体が、異なる考えを受けつけない「グループシンク」に陥っているという指摘で、なるほどと思われました。ルールや規制から外れたものは排除する、想定外の想定などできない、日本人の特異な気質だということです。すなわち、日本人の慣習に根差しているのではと指摘しています。

原発被災自治体として国等に対し様々な要望をする際も、まさにこれをひしひしと感じます。実情はよくわかっていますが、いろいろな規則や法律があつてなかなか難しいという。そのもどかしさはこちらにも伝わってきますが、こういう非常事態にはぜひ既

成の枠を取り払った発想をしてほしいものです。

実はこれは私たち役場職員にも言えることです。我々は常に頭を柔軟にして、課の枠を越えたダイナミックな動きをしていかなければ、復興を成し遂げ、次代に浪江をつないでいくことはできません。

この5月1日、浪江町は合併60周年を迎えました。昭和28年に浪江町と幾世橋村、請戸村が合併、続いて昭和31年に大堀村、菊野村、津島村と合併して、今の町となったのです。

昭和31年といえば、私は浪江小の2年生でした。その年、浪江出身の作曲家・佐々木俊一先生が作った浪江小校歌の披露式というのがあり、大講堂に集められて聞いたのを覚えています。豪華なドレスや着物を着た一流歌手の皆さんがたくさん来て、びっくりしたものです。当時は子供の数も多く、一クラスは50人ほど。合併当時の町の人口は2万7千人を超えていました。

それから60年を経て、まさかこのような状況になるとは、だれが想像したでしょうか。

しかし、私たちの世代がいま、悲惨な体験を乗り越えて目指している町の再生こそ、次の60年、のみならず「百年の大計」の基礎づくりであると考えます。いましっかりと町の基礎を作っておけば、60年後には震災前よりもっと素晴らしい町に、「夢が描ける町」になっているのではないかと。その夢を現実にするために、皆さまと一緒に歩んでまいりたいと思います。

最後に、皆さまの心身のご健勝をお祈り申し上げますとともに、今月から各地で開催される住民懇談会にてお会いできることを楽しみにしております。